戦後詩の戦争責任を生きる人

『大崎二郎全詩集』に寄せて

1

高知の大崎二郎は、少年の頃から一人で海に出て漁をしていた。海が荒れてようやく奇跡的に独力で岸に戻ることができた詩「黒鯛」などを読むと、人一倍自立心のある命知らずの少年だった。海から陸を見詰める視線は、その後の大崎二郎のあり方を暗示している。大崎二郎は日本人でありながら、意識としては島国的な日本人ではない。これほど内向きの日本人を厳しく見詰めてきた、海洋的であり大陸的な視点を持った詩人を私は知らない。それゆえに「戦後詩」の本質的なテーマを最も自覚的に体現している詩人は誰かと問うと、真っ先に大崎二郎がいるという思いが私の中に湧きあがってくる。

戦争に翻弄された父母の世代の詩人たちが、戦後の焼け野原の中に「戦後詩」の種を植え育てたことに対して、私は敬意を抱いてきた。「戦後詩」の本質的なテーマとは、日本の戦争責任について自らの問題として内在的に突き詰めて、さらに国内外の戦死者たちへの鎮魂の思いを秘めた詩群だと私は考えてきた。その「戦後詩」の課題を最も自らに引き付けて生きてきた詩人が高知の大崎二郎であった。大崎二郎の詩を初めて読んだのは一九八〇年代終わりだった。「詩学」の詩誌月評を書く際の詩誌の中に「二人（にんにん）」があった。西岡寿美子と二人で出しているから「二人（にんにん）」なのかと軽い気持ちで開いてみると、大崎二郎の『沖縄島』の連作の一篇が収録されていて、その内容と重厚さに驚かされた。私が心密かに考察しようとしていた「戦後詩」の試みが最も徹底的にしかも持続的意志で書き記されていたからだ。この一篇との出会いが後に私が書くことになる連作の詩論「戦後詩と内在批評」の中で、「戦後詩」を考察する上で中核的な存在として大きな影響を与えられたのだった。「詩学」の月評に掲載された批評文を読んだ浜田知章が、大崎二郎にその批評文のことを伝えてくれた。それから大崎二郎の手紙が来て交流は開始された。浜田知章は大崎二郎との関係を「刎頸の友」と語っていたし、詩運動の最も大切な同志であると語っていた。「山河」の主宰者であった浜田知章が、生涯にわたり最も信頼していた詩人は大崎二郎であった。そんな大崎二郎とは、どんな詩人であるかを、詩作品を通して紹介したい。

下関にて

魚臭や
重油や錆の臭いが漂っている港から
記憶をたどって歩いてゆくと
背後から冷い海峡の風が吹きあげてきて
不安げに、日が暮れかかる
電柱の、浪曲のポスターはめくれ
ハングル文字の立看板がばたばたと風にあおられている
船具店
魚網店
めしや
ふぐ料理店
ああ、もしやこの辺りだったかもしれぬ。

雪まじりのしぐれ降る
昭和十九年冬の夕暮れ
戦闘帽に雑嚢の、或は防空頭巾の
背をかがめおし黙った灰色の行列があり
その先では何かくわしてくれるということであった
俺もその列の後尾についた
暮れてからやっと順番がきて
具のない一椀の粕汁にありついた
凍えた鼻から熱い湯気の中へしきりに洟がしたたりおちた
それから
真夜中に出港（で）る釜山行きの船にのらねばならぬ
釜山から蒙疆の曠野へと……
しぼり出すような汽笛が鳴っている
海峡に出没するテキ潜水艦の噂頻り。
いっぱいの粕汁がこの世の最後の食いものになるやもしれず。

昭和十九年、ねえ
その頃オレまだ生まれちょらんじゃったもんね
店の主人は首と包丁を大げさに右にねかせてふぐの身をそぐ
丸皿に透明な菊の花びらのようにひらく
東シナ海のふぐ、の旨さ
それを三切れほど挟み、モミジオロシをつけ……
その時
ぼーと汽笛が鳴って
はっとしてふり向くと
湯気にくもった入口の格子戸に灰色の行列がつづいている
俺はめを疑った
その最後尾に戦闘帽をま深にかぶった
白面の青年がいて
じいッとこちらをみつめているではないか
あれは……
だれだ？

（「未収録詩篇／一九八〇年代」より）

大崎二郎は一九二八年に高知で生まれた。須崎工業学校在学中の一九四四年頃に高知県造船で学徒動員によって働かされていたが、十七・八歳であったにもかかわらず、中国大陸の天津や蒙疆に派遣されることになった。詩「下関にて」は、下関から釜山を経由して中国大陸に向う場面を回想している詩だ。大崎二郎は兵士としてではなく、なぜ学徒動員の労働力として中国大陸の奥深い雲崗石窟近くの蒙疆に向うことになったのか。工業学校でのストライキの首謀者であったことが何らかの遠因であったかも知れないが、詳しくは語られていない。推測だが若き大崎二郎は日本では居場所がなかったことと、中国で何が起こっているかを自分の眼で目撃したいという思いがあったのではないだろうか。。

蒙疆には日本国内の全ての炭鉱の埋蔵量の三倍もあるとも言われていた大同炭鉱があった。大崎二郎は工業高校で設計を学んでいたので、天津で設計の仕事に従事した後に、蒙疆にある大同炭鉱の一つの鉱山で、中国人と一緒に働くことになった。下関で釜山行きの船に乗る前の緊張感が伝わってくる。「最後の食いものになる」かもしれない粕汁を食べる場面は、潜水艦に撃沈されるかも知れない恐怖を抱えながら、異国へ向う言い知れぬ未知への不安と、国家に命を奪われていく民衆の救いようのない切迫感を感じさせてくれる。この時の「戦闘帽をま深にかぶった白面の青年」の眼差しこそが、後の大崎二郎が第六詩集『沖縄島』で沖縄戦を、第八詩集『きみあーゆうあ』で中国残留孤児の問題を、第九詩集『幻日記』の広島の悲劇を、それらの戦後に残された最も重要な諸問題を、誰よりも深く粘り強く連作詩篇によって書き継がせた動機になったに違いない。

青椒肉李（チンヂャオロース）

４０まえの　主（ジャンダイ）は
酒、焼酎、ビール
青椒肉絲（ピーマンの豚肉いため）、麻婆豆腐（マーボドウフ）など簡単な料理と値段しか
日本語を解さない
間口（まぐち）一間半ほどの小店が並ぶ
私ら　瓦斯（ガス）ボンベの肩に靴をのせ
せり出した一尺ほどの板の上に酒肴をおいて
のむ
そこへ息急き切って
質素な装（なり）の少女がかけこんできた
中国からの留学生で
今日からアルバイトだと
ジャングイが紹介する
屈託ない少女の笑顔

私はふと　見知らぬ他国の小市（まち）へ一人で
勉強に来た　けなげをおもう
が、すぐこの呆けの国に何を学ぶというのだろうか…

という疑問

鉄鍋に肉と野菜がじゅうじゅう炒られている
その　煙の中に
彷彿する　四老溝（スロウコウ）という
山西省の小寒村の山裾に淡く漂う
夕昏れの青いけむりを……
いま　その村のとばりをそおっとあけて
〈私もむかし大同県にいたことがある〉
と　ぽつりと言った
少女はちらと振りむき
ジャングイはにやりと笑って
〈コレ……デスカ〉と
みえぬ銃を腰だめに構え
ダ・ダ・ダ・ダ……と
低いが肚にひびく声を発射しながら、正面にき
氷のような薄笑いうかべた
青白い顔であった
否（イヤ）と手で遮り

〈炭礦（タートンタンコワン）だ、大同炭礦〉と言うと
〈ア、コレ？　ネ〉と円匙（シャベル）で掘るまねをし
にっと笑った

夕ぐれには私らの宿舎の脇の線路敷を
何百人という苦力（クリー）たち　石炭と垢で真黒いボロの群がぞろ
　ぞろ　死の影を引きずって
囲いの中へ追いこまれてゆくのであった
むかむかと風まで臭かった
彼らがねむるべき舎（いえ）とは
高いえん堤の底　高圧電流の有棘鉄線で囲まれた　家畜小
　舎同然
泥まみれ糞まみれの夜を団子虫のように
丸まって眠るだけであった
死者がでるたび　どこかへ運ばれてゆくらしかった
いや死者だけでなく重病・傷の、役に立たぬものは生きた
　まま
万人坑に捨てられた
日本人の支配する炭礦には必ず万人坑があった、という。

戦後、その凄惨な現場写真*を見ることになる
投光器は　無言で照らす／深さ70メートル、巾4・5メート
　ルの上洞、下洞にるいるいと折り重なる白骨の山

その上に　のけぞったままミイラ化している
長身の一体は
眼窩、鋭角に陥没し
大きく開けた口は底知れぬ暗い穴となり
折れ残った左右2本の歯は
牙のように尖って
息絶えている
〈お前ら決して眠るな〉
と、この、沈黙は語っている
……
斯うして何百万屯もの良質炭は盗掘され
日本、朝鮮の製鉄所に送られ
更なるアジア侵略の鋼鉄を造りつづけた。
その末裔たちが
いま、私の前で
青椒肉絲を炒めている

＊『昭和史の消せない真実』上羽　修・写真　岩波書店
（「未収録詩篇／二〇〇〇年代」より）

大崎二郎は大同炭鉱の付近にもあったという万人坑の存在を関係者の一人として証言している。日本人はこのような戦争責任から決して眼を背けてはならないと考えている。それゆえに〈お前ら決して眠るな〉という詩行が二十一世紀になっても記憶の奥底から溢れ出てくるのだ。戦争末期の中国に派遣された十七、八歳の若者であったが、自らもその中国での石炭事業に関わっていたことを断罪するかのように語る詩行は、真に苦渋に満ちている。万人坑は大崎二郎がその地に来た時は、すでに中国人に恐怖感を与える伝説にもなっていたという。「斯うして何百万屯もの良質炭は盗掘され／日本、朝鮮の製鉄所に送られ／更なるアジア侵略の鋼鉄を造りつづけた」ことの歴史認識を日本人が忘却することは、中国の民衆を今も冒涜する事だと考えている。もし日本人が忘れようとするならば、本当のことを自分が語らねばならないと、胸を切り裂くように語り始める。そして大崎二郎は〈私もむかし大同県にいたことがある〉と告げるのだ。中国の若者が日本に希望を持って来日している姿を見て、日本人は自分たちが中国で何をしたのかを自らに問い、自らの立場を曝け出すことによって若者との会話を成立させている。大崎二郎の詩行には、現在からいつでも歴史的な場面を動画のようにリアルに取り出すことが出来るリアリズムの手法がある。動画には音はあるが臭いがない。しかし大崎二郎の詩には、〈むかむかと風まで臭かった〉という強烈な臭いまで感じさせてくれるような、全感覚を喚起させる想像力が駆使されている。大崎二郎は自分を含めた日本人が「更なるアジア侵略」のために「盗掘」を継続してきたという歴史認識を突きつける。大崎二郎は石炭を掘ると湧いてくる地下水をポンプで汲み上げる排水装置などの技師であった。中国人と一緒になって行った作業現場を誰よりも知っているからこそ、このようなリアリティがある作品が書けるというのでなく、大崎二郎は中国民衆の痛みや苦悩を我がこととしているからそれが可能なのだ。掘り出された石炭は中国民衆のために使用されたのではなく、日本の「更なるアジア侵略」のために使われていくことの理不尽さを中国人の視線で断罪をしている。その意味で日本を他国の他者の視線で厳しく見詰めることのできる詩人として、大崎二郎は中国というアジアの大地から育てられた詩人といえるかも知れない。私が大崎二郎に敬意を抱くのは、他国の他者の視線を忘却することなく、このような戦争責任を深く持続的に問う姿勢から硬質な詩篇を一貫して創り続けてきたことだ。その姿勢から後世の者は「戦後詩」の重要な課題を感じながら、戦争責任の意味を考え続ける端緒になるに違いない。

大崎二郎は、終戦を大同炭鉱で迎えることになるのだが、家族ぐるみで親しくなった一緒に働いていた中国人達から引き止められたという。その家族の娘さんを大崎二郎は重ね合わせて想起していたのかも知れない。帰国時に風土病で熱が42度にもなり生死をさまようことになるが、陸軍病院での治療によってようやくその年の十一月に高知へ帰国できた。

2

大崎二郎の詩作の出発は、帰国した翌年の一九四六年の十二月に高知新聞に詩「灰色の悲歌」が掲載されたことだ。無名の若者から投稿された詩を高知新聞はなぜか掲載した。それはこの詩に戦後社会を生きていくために必要な何かを感じたからに違いない。後の大崎二郎の硬質な詩篇に比べて、最終行などは叙情詩的ではあるが、その中にも他国の他者への視線が鋭く書き記されてある。

灰色の悲歌

ごうごうと熱風は地平を灼きつくし
女人の生理は又しても熱砂になやむ
春秋なき大陸の風土に
夏されば冬めぐる
大いなる宇宙の法則を呪った幾十日
遂に　狼は血を喚び　吹雪は
はかない死を　目前に示唆したれど
ああ　黄塵がめくる　悲運の暦日は
一片のエレジーと共に
灰色の砂礫の国を　おしひろげた
死ぬべき刹那刹那を辛うじて生き

情熱のコロナを焚いて　ひたすら
求めてやまなかったもの
ああ　此の国に今
血まなこになって探す
それらの　数多き忘れもの
可愛そうな　おとめ達よ
泣く涙さえ今はないというのか
巷を吹く風でさえが
ずたずたに引裂かれた
愛情の布切で　俺達をひっぱたく
星よ　ぬらしておやり
　　泣くことなき人々を
星よ　桃色に匂う
　　あなたのなみだで

この詩を書いた時に大崎二郎はまだ十九、二十歳だったのだ。しかし後年のリアリズムの詩篇に流れるものを予感させている。戦後社会の「数多き忘れもの」を血まなこになって探そうとする青年詩人の決意がうかがえる。「大陸の風土」の「黄塵がめくる　悲運の暦日」を決して忘れてはならないこととして感受していたのだ。大崎二郎の戦後はこのようにして出発したことを伝えてくれる貴重な詩篇だ。当時は母校の工業学校の臨時講師となって勤務を始めた頃だった。その頃に詩誌「詩座」の同人となったが、その「詩座」が残されていないため、どのような詩が書かれていたかは確認が出来なかった。またその後に新潟の浅井十三郎が主宰する詩誌「詩と詩人」に寄稿して詩を本格的に書き始めた。大崎二郎は一九四七年に講師を辞めて、工業薬品会社に就職した。和紙製造に関わる化学薬品の関係であったらしい。後に第四詩集『走り者』で大崎二郎が土佐の和紙職人の世界を書くことが出来るようになったのも、紙製品の製造過程の専門知識があったからで、そのことがよりリアリティを増した要因だったのだろう。

第一詩集『その次の季節』は大崎二郎が二十六歳の一九五三年に浅井十三郎の「詩と詩人社」から刊行された。この詩集に収められた二十三篇の詩の多くはきっと詩誌「詩座」と詩誌「詩と詩人」に収録されたものであったろう。タイトル詩「その次の季節」を引用してみる。

その次の季節

ふっていた　ふっていた
僕たちがうまれるそのずっと昔から
いちどもやまず
気ちがいのように
それはもう雨ともよべない　雨だった

父はいっていた
おれは終始正気だったぞ
母はいっていた
目のとどくところすべて殺人ひろばだったのよ
僕たちはそれをきいた
歴史と　母の　胎内で

かつて家畜としてかいならされていた
祖先たちの
憤りや
かなしみや
その夢や
ガリガリと背骨にふれあう銃剣のいたみが
僕たちの背骨に　のこっている
波のようにあとからあとから
僕たちの血のなかに
生きかえってくる

暴虐の君が代
けれども父たちはいつも正気だった
それを証明しなければならない
人々が生きのこっているうちに
それは急がねばならないことだった

合唱は四つ辻にわき
ねむっちゃいけないぞ　と
むすうの胸いたにこだまして
僕たちのくに　にっぽんの大潰瘍
君が代の墓は　あばかれていった
僕たちの兄弟を屠殺した
どんらんな獣族の
こえふとった臓ふが　あばかれていった
もはや
かれらが生きてゆくために
一寸四方の余白もゆるされないのだ
けれども　まだ
ふっていた
ふっていた
それはもう雨ともよべない　きちがいのような雨だった
地球じょう　ぬかるみはてた
だが父たちよ
やがて天も地も泥んこになり
ぎょう縮して天体をはなれる日はくるのだ
それは僕たちのあたらしいせかいに
掌にのるほどちっちゃないん石となって
おちてくるだろう
すかーと　そらのはれた日に

父らよ
僕たちはその日をむかえにゆく
雨の歴史のマンホールを下り／泥にまみれたひとびとのなかへと

私はこの詩を読んだ時に、戦争に翻弄された若者が戦後社会の中でどのような思いで、生きていくかを痛切に問うていた在りようを感じることができた。戦争時代のことを父母たちに問うてみても、決して解答はでてこない。父は自らを「終始正気」だったといい、母は「目のとどくところすべて殺人ひろばだったのよ」という。大崎二郎はそれらを「歴史と母の　胎内で」で聞いたのだ。そして「かつて家畜としてかいならされていた／祖先たちの／憤りや／かなしみや／その夢や／ガリガリと背骨にふれあう銃剣のいたみが／僕たちの背骨に　のこっている」ことを丸ごと引き受けようとする。祖先たちの記憶を肉体の背骨の「銃剣のいたみ」の記憶として大崎二郎は、第一詩集のタイトル詩「その次の季節」に刻んだのだ。そして「戦争責任」への問いは父母たちの世代が答えないのなら、「その次の季節」へ答えは自分たち戦争の悲劇を見詰めた世代が、実践を通して解答していかなければならないことを宣言している詩であると考えられる。大崎二郎は「その次の季節」を書き記すことによって、忘却し水に流してしまう「終始正気」な日本人の精神構造に「殺人ひろば」を生んでしまう他者不在の狂気を透視していたのだ。そんな凄まじい日本人の負の遺産から大崎二郎の詩的出発は開始されたのだ。

3

日本人は、十九世紀・二十世紀のアジアへの侵略行為が、いかに悲劇を生み出したのかを、戦後に一貫して自らの精神性に問い続けているのだろうか。歴史学者家永三郎が世界史において日本人の「戦争責任論」を論理的に体系的に示し、日本人自ら決して逃げることができないように問うてきた。そんな「十五年戦争」を引き起こした日本人は自らの抱えていた侵略的な精神性を根底から総括してきたのだろうか。その問いにきちんと向き合う前に「日本は中国を侵略していない」とか、核武装が国益だという自衛隊の元幹部がすでに現われている。この人物は今でも週刊誌などにコラムを持ちテレビや講演で自説を曲げずに一部の大衆から受け入れられている。その影響を受けたいわゆる「ネット右翼」の若者たちが偏狭なナショナリズムで中国・韓国のアジアの民衆を蔑視する言説を振り撒いている。そんな歴史の事実から眼を背ける下地が日本人の中にまだ存在している。

歴史学者藤原彰の記した『南京の日本軍』、『天皇の軍隊と日中戦争』、『中国戦線従軍記』などは、なぜ日本の軍隊がこれほどまでに中国の民衆に対して残酷・非道になりえたか、その侵略戦争の実態の解明を、厖大な記録と自分の中国への従軍経験を踏まえて真摯に果たし、優れた成果を残した。私は家永三郎亡き後の信頼できる歴学者の一人として藤原彰の著作から多くを学んできた。日本の軍隊は兵士の命を尊重しなかった。日清戦争では、戦死・戦傷死者は約一四〇〇名だったが、病死者は十倍以上の約一万九千名もいた。劣悪な衛生状態で戦闘を継続した結果で、患者延べ数は約十七万人で、出勤部隊の総数に匹敵するほど劣悪な衛生状態だったといわれる。また日露戦争においても旅順要塞に対して銃剣だけに頼る決死隊を繰返し、機関銃によって死体の山を築いた。そのような生命軽視の日本軍の絶対服従の歪んだ精神性が、日中戦争で無謀にも補給なしで戦線を拡大させてしまい、国際法を無視して、現地での略奪や多くの殺戮を引き起こし、結果としてアジア太平洋戦争の二三〇万人の日本人兵士の死者の半数以上が餓死か栄養失調であった原因だと考えざるを得ない。天皇制の権威を絶対服従の日本的な精神に利用した政治家や軍部たちの脆弱な思想性が、いまだ一部の政治家や自衛隊幹部に日本的なルサンチマンとして残っていて、歴史を知ろうとしない若者たちに悪影響を及ぼしている。

一九一五年の二一ケ条要求、一九三一年の満州事変、一九三二年の上海事変、一九三七年の南京大虐殺、一九三八年から五年半も続く重慶爆撃など、宣戦布告なき侵略戦争であるのに「事変」とすることによって、国際法を守る意志を日本政府や日本軍は持っていなかった。「事変」は戦争ではないからと都合よく解釈し、国際法で禁じられていた捕虜や民間人を辱め、殺戮し、無差別爆撃や七三一部隊などの化学兵器や細菌兵器を使用しても、日本政府や軍部は中国を屈服させようとした。しかし厖大な中国民衆を敵にして、持久戦になれば日本の軍隊が勝てるはずがないことは誰がみても明らかだった。天皇制への絶対服従で成り立っている日本の軍隊は、日本の民衆の生命を軽んじて成り立っていて、それが他国である中国の民衆への差別意識に繋がり、投降兵士と民間人への恐るべき人権無視の大量虐殺に繋がったのだと藤原彰は冷静に事実から解き明かしている。また南京事件を一貫して研究してきた洞富雄の労作『決定版・南京大虐殺』を取り上げて「南京城内外で死んだ中国軍民は、二〇万人をくだらなかったであろう」という実証的な指摘を日本人は謙虚に受け止めるべきだろう。教科書の南京大虐殺の記述を是正するために反論された『南京戦史』（畝本正巳・元防衛大学教授、財団法人偕行社）は軍民合わせて三万二千人とか三万六千人であると一部の部隊の残された資料だけを少なくまとめて、しかも大虐殺の国際法違反もなかったと歴史を偽造編集しようとしてきた。それに反する証言がたくさん出てきて一部は是正されつつあるらしいが、このような歴史を直視しない歴史家、保守政治家、教育官僚、自衛隊の元幹部たちが、若者

達の精神をいかに蝕んでいるかは、インターネットの南京大虐殺関係サイト見れば明らかだ。これでは他国の他者の視野を持てないひ弱な人間を育てているだけだ。一番の被害者はそれらの歴史偽造をまともに信じようとした若者達だったろう。その意味では家永三郎、藤原彰、洞富雄のような歴史家達が、明治維新以後の日本政府と軍部そしてそれに迎合した人々の行ったことの様々な問題点を、実証論理的に世界史的な観点で明らかにしてくれたことは、誇るべきことなのだ。戦後も六十五年になる今こそ冷静に日本人はその事実を受け止めて未来を創っていかなければならない責務を負っているだろう。

傷害致死

散乱する月光の渚を
一匹の大海亀が這っていた
濡れて光る巨大な甲殻は
幽暗、太古の様相を再現

だが、祭りの酒に酔った奴がそれをみた
やがて何人も集まり、とり囲み相談した
環のなかの一人が言った
亀の肉はうまいぞ！

罪のない者がいま
まさに殺されようとしている
それは俺にとって、あの老人そのものだった
一瞬、亀の背で
月光にきらめく出刃をはねかえしていた
罪のない者を殺すんじゃねえ！　と
再び、そして三度
月を背後に奴は真黒い塊となって
襲いかかってきた
俺は夢中でそれを受けとめたんだ
丁度喉笛
噴く血に俺は呆然とまみれ
のけぞり斃れる、青白いいま一ツの
新しい罪をみた

波に洗われつづけ
昔からそこにあった岩のように
亀の甲殻は光っていたが
その時、ようやくにして
あの老人の罪ほろぼしをしたと錯覚したのだ
うすれてゆく
罪の幻覚の果てで
くいこむ手錠の鋭い金属音をきいた

約七年も昔のことだ
俺がここに来て飲もうとした時
その話を聞いたのだ
土地の与太者がつい先刻
出刃をもって浜へ走ったと
俺はその時から想像の囚人だった

北支
白い印象の雨が降っていた
崩れはて、くすぶりつづく村を見下す丘に
拉致され
木の根方に縛りつけられた一老人の
哀訴し、脈搏ちふくらんでくる皺の首
年古りた亀のような首だった
雨がつたってゆくその喉笛めがけ
息もとめずに突きとおし抉ってしまった銃剣
俺の、このコップをもつ手だった
ごぼっと異様な血塊とも泡ともつかぬ奴が噴き、流れおち
　たのだ

浜に来て
俺は息切れの底で嘔吐をこらえていた

七年も昔のことだ。

大崎二郎の詩篇は家永三郎や藤原彰のような歴史家のリアリズムと他国の民衆の心と日本人としての心の痛みが重層的に表現されている。大崎二郎は日本人の中に中国の民衆を虫けらのように殺戮をしても恥じない兵士たちがいたことを記している。そしてそんな兵士を止めようとした日本人もいたことも記している。たとえ戦争であっても理不尽に人を殺してもいいのか。また殺そうとする兵士を止めようとして逆に殺してもいいのか。という問いを自らに鋭く問いかけている。このようなギリギリの問いを読むものに提示していくことが大崎二郎の詩の特質なのだと言えるだろう。読むものを傍観者にさせないで、その情況に引き込んで、自分ならどうするのだと、問い続けてくるのだ。その意味で大崎二郎の詩を読むことは、読む者の内面に楔を打ち込むように重たい問いを突きつけられ、生きる思想の意味を考えさせられる。被害者と加害者の場面に傍観者もいつの間にか、そこに加担して壮絶な歴史的な情況を作り上げてしまう詩なのだ。大崎二郎はこのような詩法をどうして身に付けていったのか。もちろん中国の蒙疆での体験が大きかったことは確かで、地元高知で宮地佐一郎との「詩座」や土佐文雄との「鉄と砂」を発行しながら書き続けることを原点とした。しかしそれだけでは飽

き足らずに、浅井十三郎の「詩と詩人」にも寄稿し、後の「山河」の中心人物となった長谷川龍生や湯口三郎などとも知り合うこととなる。その関係から、浜田知章と長谷川龍生たちが高知へ岡本弥太の詩碑を見るためにやってきたという。その詩碑は高村光太郎の筆文字が彫られていた。岡本弥太の未完詩集『山河』を後世に残すことや、弥太の詩的精神を引き継ごうとした浜田知章にとって、その詩碑に出向くことは聖地に行くようなものであったと想像される。浜田知章は地元の案内をしてくれる詩人として大崎二郎を頼りにしたのだ。浜田知章は晩年に大崎二郎を「刎頸の友」と言っていたのは、このような出会いの中で生まれた言葉だろう。「山河」の精神を引き継ぎ体現する盟友として大崎二郎を高く評価していたからだ。大阪に出張の際には、浜田宅に出入りして親しくなり、「山河」の行動的リアリズムの考え方を共感して、作品を発表するようになる。その成果が第二詩集『下水道浚渫中』（山河出版社）だったのだ。『山河』が一九六一年に終刊になると、大崎二郎は高知の詩人西岡寿美子と一九六三年二月に「二人」を創刊し、その後の代表作のほとんどを発表していくことになる。

4

大崎二郎の名前が全国的に広がったのは一九八二年に刊行した第四詩集『走り者』によってだ。この詩集は土佐和紙の紙漉き職人たちを書いたもので、高知土佐の紙漉きがいかに過酷な搾取を受けてきたかを明るみに出しただけでなく、高知の風土と紙漉きたちの誇りをえがききった今までに類例のない叙事詩であった。

『走り者』は三章に別れる。一章の十三篇は高知の仁淀川流域にいた七百名以上の紙漉きの職人技を詩行に刻みながら、その報われない過酷な労働実態を明らかにしたものである。また土佐和紙職人の技量が優れているゆえ、西陣織の金糸の基になる金箔原紙の製造や、軍人から鉄のような紙ができないかとかいう馬鹿げた相談を受けたり、風船爆弾の素材に利用されたりすることなど人間の欲望や政治に翻弄される悲劇も語られている。二章は「逃散紙一揆」を引き起こした紙漉きたちの止むに止まれぬ抵抗力を記した長編詩「走り者」の一篇だけで、紙漉きたちの誇りを歴史的事実として記している。三章の五篇は、戦後になって手漉業から機械漉きになった和紙工場もまた、大手資本によって競争力が無くなり、廃業になってしまう和紙業界の在りようを書き残している。一冊の本でこれ程の土佐和紙の紙漉き職人たちの誇りと悲劇の内面を見詰めて、表現されたものはなかっただろう。冒頭の詩「迷う紙」を引用してみたい。

迷う紙

すたんどに灯をともすと
和紙を貼った笠は
闇のなか　もえあがるように息づき
しじまのなかを夕靄のようにあかりがひろがってゆく
どろどろ　どろどろと
とおい紙漉き達の労働の声がたちこめる
長短一本一本の繊維は息をひそめて
しらじらと平静をよそおっているが
絹のようにすけてみえる素地の上を
長く強靭な楮草（くさ）*はにわかに狂い
乱れて絡まりあい奔放にのたうちまわる
あるいは、むき出しの神経のように白く無数にほどけ
細い痛みとなって無限の薄明へとけていくさま
そのままを雲龍の図柄に漉きあげて
人はそれを　この上もなく美しいという

だがしんじつそうか／灯を消しても　闇のなか白い楮草は
流れつづける
重い吐息の、空（くう）にまい立ち、沈み。
夜陰にしずむ韮生（にろう）の山里・成山（なるやま）・半山（はやま）・神谷（こうのたに）・鹿敷（かしき）
以来、楮をむすあの甘くえぐい匂いは消えうせ
せせらぎの音のみ昔のままで
それはしだいに高まりつつ
激流となっていま、俺の想念をこえてゆく。
（略）
だが、これから
紙はいったい、どこへゆく？
伝統的工芸品産業だ？　キワニス賞だ？
それは紙すきにとって何なのだ
紙のこと語るなら口をぬぐったきれいごとはよしにして
どろどろ　どろどろの　しがらみの
銭（ぜに）と飯（めし）と楮草の渦まきの
わきかえるソーダの煮汁の
汗の　ねのり*の粘液の
一層ねばる唾の、からまる痰の
しび凍る手足の　うらみつらみの
混沌の不安
白濁のめまいをいえ。
字になるほどのものではないが
たぐってゆけば　逃散紙一揆にはじまる　たかが知れた芋
　蔓ほどの
紙漉きの系図だ
専制　搾取に百姓業不相立と愁訴嘆願し
百姓御赦免第三条
或いは首うたれ
それでも紙を漉いてきた

煮えたぎる茶色い楮の渋をあび
ねのりを搗き　舟(ふね)をかきまぜ、こぶり
桁を握るしか能のない紙すき
いまだにぼろぼろ欺されつづけ　買いたたかれ
これが紙かよ、まるで絹かと思うほど美しいのお。とほめられて
大の男が顔あからめ、貧乏の冷(ひや)水にどっぷりつばかったまんま
それでも秋空の　鰯雲、鱗雲のようなものは死んでも漉かん
一点の乱れ　曇り翳りのないものを
己れの迷いをいちまい、いちまい
漉きはがしてゆく
今日限りの和紙(かみ)をいちまいいちまい漉きあげてゆく。

＊楮　こうぞ、かじ、かじくさ、かみそ等と呼ばれる。三椏とともに靱皮繊維のとれる代表的な和紙原料。
＊ねのり　漢名を黄蜀葵、和名をとろろあおいという。根をすりつぶした時に出る粘液が、紙を漉く時の紙料の分散剤として用いられる。

この詩集の特長は、美しい和紙を生み出した紙漉き職人への畏敬の念に貫かれていることだ。そしてそれを使用する者や搾取する者たちへの無理解に怒りにも近い心情が時に迸り出てくるところだ。仁淀川周辺の紙漉きたちが背負ってきた清貧な暮らしがこの和紙と同じように美しいものと大崎二郎は感じたからこそこの『走り者』という詩集が誕生したのだろうと想像されてくる。

5

一九八六年に大崎二郎は十数年ぶりに第五詩集『夢の原頭にて』を刊行した。冒頭は「黒い箱型の汽車に乗り／褐色の／亜細亜の、高地をはい上がってゆく／機関車は喘ぎ、息絶えだえに蒸気を吐き。／荒涼たる野のような、空を／暗い雲はかすれとんでゆく。」で始まる。停車した駅で中国の少女が鶏の丸焼きを売りにくるが、車窓から出た多くの手が少女の鶏を奪ってしまい、少女の泣き顔が後ろへ消えていく光景を記している。大崎二郎は中国大陸の原頭（野原の真中の意味）での出来事を夢で見続けていたのだろう。それを想起することの意味を再確認した詩集であったと思われる。

一九八〇年代には詩的言語から意味をずらしたり剝奪させることが詩の進化であるような言説が流れ始めた。例えば吉本隆明の『戦後詩史論』の中の「修辞的現代」という言葉によって踊らされて、真の修辞(レトリック)の根源的な意味も戦後詩の重要なテーマである戦争責任も持続的に考えられることはなかった。このようなバブル時代の最中に連作されてバブル時代の終わりの一九九二年に、大崎二郎の第六詩集『沖縄島』が刊行された。この時代にこれほどまで戦争責任について詩作品で徹底した連作をした詩人はいなかった。吉本隆明のいう詩人や詩的言語の八十年代の現状認識が現実から浮遊した言葉だけの「修辞現在」であるとするなら、その反論として最も対極にあった詩が大崎二郎の生み出した『走り者』や『沖縄島』であったと言う認識を私は抱いていた。『沖縄島』は二十九篇から成り立っている。一章は「風の島」一篇だけで成り立ち、一六〇七年の薩摩藩の島津の軍船によって沖縄が植民地化され、人頭税などの過酷な統治を書き記している。この南の楽園であった沖縄の富を薩摩や後の日本政府が利用し続けようとしてきたかを暗示している。二章の二十四篇は実際の沖縄の戦場跡に取材に行き、多くの沖縄民衆が集団自決した場所から立ち上がってくる死者の声を聞き取ろうとして、詩行にそれらを書き記していった。また日本政府・軍人やその中心的な存在である天皇の戦争責任を真正面から問うている。次の一篇はその戦争責任を問うた詩篇である。

首里城趾にて

南島の朝は
青暗い　光の粒が音もなくはじけ
果てしなく湿潤が降る
それから、無影灯のように輝きはじめるのだ。
北緯二十七度
真夏の太陽が上がらぬまに
私は白い首里城への坂道をのぼりはじめた
かつての琉球王国
幻の王城へ。

とおく、一八七九年春の坂道を遡って行くと
あたりは急に冷えはじめ
音は死に絶えて
風景はネガチブにゆっくりと反転してゆく
光の木立は鬱蒼と暗い赤木の森と化し

天に枝葉もみ鳴らし
百年前の濃緑の風が吹いてくるのであった
もしや……
私は想像の王に会える予感がしはじめていた
だが、貧しきかな
その輪郭には、きまってあの男の顔が重なってくる
あの男……

一八七九年三月二十七日
首里、高台に吹く南風はかすかに潮の匂いをふくみ

六ツの城門を閉ざした首里城の
黒光る犬槇の梁は心なしか沈み
重苦しい刻がよどんでいた
その空気を切り裂き
ばしッ！　激しく床板が鳴った

ええい！処分じゃ
琉球処分！
……

随分、刻が流れたか
前方、木の間がくれ
森閑と、王国五百年は白い闇となって漂っている
ふと、照葉(てりば)の間(あわい)から
百年前の蟬の声が降り注いでくるのをきいた
ふりむけば鬱蒼たる赤木の緑陰はなく
陽炎の中に己の影が燃えているのみではないか……
ああ、それから　あの男ら
頻繁にこの島へやってきはじめた

……御聖影を御輦(おてくるま)に奉蔵し、整々と庁門を出づ。其の行列は警官先駆、次に国旗及び校旗を翻し、次に職員、児童、次に校長、中央に御輦、次に郡長、郡視学、郡書記、管理者、最後に職員、児童等左右を固めつつ那覇市内を御通輦(れん)、松田橋を越え与那原(よなばる)新街道に移らせらる。道すがら警官は常に数十歩前にありて往来の人馬に注意を与ふ。殊に御通輦所に当る村々の民家の如き門々、国旗を掲げしは、注意のほどいと有難く見受けたり。真和志尋常小学校職員、児童は真玉橋の新街道に奉迎し、君が代の唱歌を奏せり。……

／／煙霧のかなた　たなびくように皇国がみえはじめる

それは、たった一枚の写真であった。
何たる笑止
でも笑えるか
あまりの空しさゆえに、わらえるか
神の影絵は沖縄中にばらまかれていった
しらず　しらずの　苦世(にがゆう)であった。

学校では、沖縄方言を禁じ
ふと、もの言えば首から「方言札」吊るされ
次にしゃべる者をみつけるまで外すことならず……
沖縄よ
汝の首に　母の言葉を吊るし
とおおい子守唄を吊るし
罪人のように　父を吊るし
父の言葉を吊るし

重い、おもい故山の石をつるし
まぎれない皇民になっていった
股肱の島よ
島が割れて沈む日も

あの男は皇宮の森からおろおろと東京の焼ける火をみていた、か
一九四五年二月、近衛文麿は上奏文を以て、敗戦は最早必至なりと
戦争終結を進言したが容れず
もう一度ぴしゃりと撃て、と命じ
その間に国体護持を連合軍にとりつけようとした
漸く木戸幸一の進言をいれて戦争終結を実現するよう命じたのは
六月二十二日、沖縄が潰滅したまさにその日
既に……この島で、十九万人が死んだあとだった。

太陽はほぼ真上にあった
ふと
初老の男が来て、一本の木を指さし示した
地上三メートルから上は吹っ飛び
八ツに裂けて尚、王城の森の名残りをとどめる
一本の赤木であった
その赤い肌に榕樹(ガジュマル)がぼうぼうと気根を垂らし
絡めて、ひしと抱きしめていた
おきなわを。（略）

大崎二郎は沖縄の侵略四〇〇年の歴史を記し、それを日本人に突きつけて、今もその歴史が日米の政府によって継続されていることを明らかにしている。ドイツの宗教哲学者ヤスパースは「罪責論」でドイツの戦争責任について考察する際に四つの責任に分けている。一つは刑事上（法律上）責任、二つは道徳上責任、三つは政治上責任、四つは形而上的責任であるが、大崎二郎もまた日本政府・軍部そして天皇の四つの責任を詩作の中で、難しい試みであるにもかかわらず誰よりも厳しく多面的に問い続けていた。政治学者の丸山真男も歴史学者家永三郎もこのヤスパースの戦争責任論を参考にしているが、大崎二郎も日本人と日本政府と軍部に対してこの四つの責任を問うているように思われる。他国を侵略してはいけないことや他国の捕虜や民衆を保護する国際法を遵守しようとしたか。遵守しなければならなかったことを理解していたが沈黙をして自己保身をしていたのではないか。国際法を遵守しない政府や軍隊を支持してしまったのではないか。戦争で亡くなった厖大な人々に生涯にわたり贖罪感を抱いて

いるのではないか。大雑把だがそんな四つの責任は何らかの形で、戦後に生き残ったものも戦後生まれのものも引き受けなければならない課題だと私には感じられる。大崎二郎は日本人が沖縄を植民地化していく過程を緻密に詩作した。そこで暗示されているものは、沖縄でなされたことが台湾や朝鮮で行われて植民地的な成果をあげていき、その経験を中国満州や内蒙古などの華北地方そして中国全土へとよりスケールを広げていった。その実践したことが日本政府や軍部の潜在的な侵略の意思だったと考えられる。日本の侵略の原点は沖縄にあったことを、大崎二郎は『沖縄島』を書き記しながら読者に伝えたかったのではないか。その侵略の原点である天皇制の精神性を不問にしてしまう在り方を日本人一人一人に厳しく問うているのだと考えられる。

大崎二郎は第七詩集『海色抄』で土佐近海の魚を通して生きていることの苦さと同時に喜びをも物語っている。魚だけをテーマにしてこんなに味わいがあり、酒飲みの肴特集のような詩集が編めるのは、大崎二郎だけだ。四歳の時に実母から離された孤独な少年が海の魚と語らってきた塩辛い成果なのだろう。

二〇〇一年の第八詩集『きみあーゆうあ』は中国残留孤児をテーマに編まれた詩集だ。二〇〇六年の第九詩集『幻日記』は広島の原爆について真正面から取り組んだ詩集だ。この二冊の試みも歴史的事実や残された記憶や事物を踏まえながら、想像力でその悲劇に肉薄し遭遇した民衆の心の奥底に入り込んでいく。そのリアリズムの詩法は、読む側に日本人の戦争責任とは何であり続けるのかを問うていく。また未収録詩篇には中国大陸での体験の他に、特攻兵士、戦艦大和のことなど同世代の若者の悲劇を一貫して書き残している。そんな大崎二郎の戦争責任を生きようとする全貌をこの全詩集が明らかにしてくれるだろう。

この全詩集刊行の最終の校正確認が終わり、療養中にもかかわらず六百頁を超す膨大な校正をしていただいたお礼を大崎二郎に直接伝えた。その際に思い切って質問してみた。〈大崎さんは次の詩集のテーマに「戦艦大和と知覧の特攻兵士」を考えておられるのではないですか?〉。即座に一緒ではなく「戦艦大和」と「知覧の特攻兵士」を別々の詩集にする構想を持っていて草稿の一部は書いていると話された。大崎二郎は私に「戦艦大和」で死んでいった若い海軍兵達の姿を生き生きと語ってくれた。その詩的情熱に大崎二郎は健在であり、きっと体調が戻れば必ず書き残すだろうと確信した。

日本人が世界の中で名誉ある位置を占めるために、どのような歴史観を持ち行動をしたらいいか。その際の指針として十九・二十世紀の日本が行った戦争責任の意味を根源的に考える上で、この『大崎二郎全詩集』が一級の文学的な資料となり、多くの後世の者に読み継がれることを願っている。